

見城悌治著

留學生は近代日本で
何を学んだのか

——医薬・園芸・デザイン・師範

〈日本経済評論社、二〇一八年三月、三〇四頁〉

近年、中国人日本留学史研究はかつての著名人を中心とした研究や集団としての中国人留學生研究から、学問分野、出身地域、あるいは留學目的や留學先学校ごと等の細分化されたテーマでの実証的な研究へと、質量ともに飛躍的な発展を見せている。その背景には、中国で日本留學経験者の歴史的役割が見直されるようになったことだけではなく、とりわけ九〇年代以降、中国から日本への留學生が急増し、多様化も進んで日本各地の様々な種類の学校に彼らの姿を見かけるようになったことも影響しているように思われる。

本書はそのような研究動向を反映して、千葉大学のルーツ校である官立千葉医学専門学校、千葉高等園芸学校、

東京高等工芸学校、千葉師範学校の四校に留學した中国・台湾からの留學生について、在学中の状況のみならず、帰国後の足跡まで丹念に追った労作である。

これらの諸学校が選ばれたのは決して著者の勤務校の前身校にあたるという便宜的な理由だけではない。千葉医専は一九一〇年代から二〇年代にかけて全国五つの医専のなかで最多の留學生を受け入れており、千葉高等園芸学校は園芸学の講座を開設した嚆矢であり、さらに東京高等工芸学校は工芸デザイン分野では官立としては日本で唯一の存在であった。そのため、これらの諸校で学んだ中国人留學生は、帰国後に各分野で重要な地位を占めることになる。南京国民政府時代に防疫・衛生行政に従事して中国「公共衛生学」の第一人者と目された人物、広大な南京中山陵園と附属植物園の設計施工の責任者を務めた人物、「中国現代茶学」の礎を築いた人物、国立北京芸術専門学校（のちの中央美術学院）の校長と

なった人物等々、中国の各界では知る人ぞ知るであったに違いない人びとが、一地方国立大学の前身校で学んでいたことは注目に値する。

日本近代史を専門とする著者は、この研究の目的の一つとして「同じ時代に同じ空間で過ごしてきた留學生を含みこんだ形で、近代日本を捉え直すこと」を挙げている。本書の最後に紹介されている中国留學生の見学旅行の記録は、彼らの日本を見つめる視線が、決して「進んだ日本、遅れた中国」というフィルターで曇らされてはいなかったことを示している。まさに近代化の波に洗われつつあった東北地方・北海道（一行はアイヌの村も訪れている）の町や村の有様を彼らはどのようなに眺めたか——そこには確かに、中国人留學生が祖国に思いをはせつつ共有しうる「近代日本」の実像が展開されていたのではなからうか。他の学校に学んでいた留學生を含めて、さらに追跡してほしい課題である。（砂山幸雄）